

2026年 9月泉の会 直子先生のお話

『自由』が育むもの—— どこまで『自由』にするの？ 何のために『自由』にするの？

善隣幼稚園が保障したい『自由』とは？！——

今回のテーマは『自由』です。よく「善隣幼稚園はなんて自由なんでしょう！」と言われますが、どこまで自由にするのか？何をもって自由とするのか？というのはなかなか難しい問題です。

わたしが善隣幼稚園で働き始めた時、自分で選んでここに来た訳ではないこともあって、自由がキュッと束縛された気持ちからスタートしたことを覚えています。そして前任の先生から責任を引き継いだ頃、重責に耐えかねて、「もうやめたい」と4年生の息子に愚痴をこぼしたところ、息子は「でも好きなんですよ？」と言ったのです。—確かにそのとおりでした。息子はわたしがこの仕事を楽しんでいることに気づいていたのです。わたしは「うん」と返し、この仕事を続けていくことができました。この時にわたしは、自分の意志で自由にこの仕事を、そしてここを背負っていくことを選んだのであり、それに伴い責任が生まれました。この「自分が選んだことだから、やり遂げよう」というのはわたしたち大人の理屈です。でも、これを小さいこどもにそのまま当てはめてしまうのはいけませんよね。こどもの場合、「やりたい」というのはその時の感情や衝動であって、意思で先を見通して決めたわけではない場合があります。そうできない立場や年齢もある、ということとは認識しておかなければならないと思います。

さて、話を保育の方へ向けましょう。一学期の保育の反省、そして夏休み期間中の研修を経て、保育者間で確認したのは、こども一人一人のワクワクから遊びは始まり、それがこの幼稚園という集団の中で、誰かのワクワクとつながっていき、ワクワクは広がっていく、ということです。保育者はあくまで増幅装置です。遊びのエンジンはこどもがかけて、何に興味関心があるのかはそのこどもが決めて、それに仲間が集まったり、時には離れて、時には一人で、といろんな物語を作りながら広がっていく…。保育者はそれを増幅させていくためのただの仕組みなのです。でも、このような、こども自身の内側から湧き上がるワクワクは、自由を保障しなければ生まれません。自由を保障することは、こども自身から湧き上がるワクワクを生み出すためにはなくてはならないことなのです。

先日の同窓会で、卒園生たちから幼稚園での学びについて聞いてみたところ、「人それぞれ遊びが違うこと、気分や気持ちが違うことに気づいた」という声がありました。一人ひとりの好きや気持ちの違いに気づくことができたのは、自由が保障されていたからです。また、後で考えると「ありえない」と思えるような泥遊び等の経験を通じて、「自由な発想という形で、今の学校生活に影響を及ぼしている」という声もありました。自由にしたこと間違いなく行動を取った時も、どこまでもこどもの気持ちに寄り添うことで、こどもは安心し、自分で正しい行動を選ぶことができるようになります。その他、在園中は幼稚園に行くのに苦労したような卒園生からも、「先生に支えられて通うことができた」という声や、「太鼓や小太鼓を演奏したのが楽しかった。それが今の好きなことに繋がっている」という声があり、そのこどもらしく過ごせることを大切に保護者と連携し見守ったことで、お子さんにとっての自由が保障され、幼稚園時代がその後の土台をつくっていたことを知ることができ、嬉しく思いました。

何のために自由にするか、それは自分の足で立って、仲間と支え合えるようになるため、さらに「自分の自由はこんな自由」だ、と自分らしさを知るためだと考えています。善隣幼稚園は、こうした自由のもつ意味をしっかりと考えながら、今後も運営していきたいと思っています。

最後に、本を一冊ご紹介します。この本は、大阪の大空小学校という小学校の取り組みを紹介したものです。この小学校は、誰一人排除せず、みんなが同じ場所で自分の持っている力を伸ばすというインクルーシブ教育を目標としており、従来の見える評価・画一的な評価ではなく、見えない力・見えない学力、すなわち『4つの力』を大切にするという取り組みを行っています。『4つの力』とは、互いを大切にできる力、自分の考えを持つ力、自分の考えを表現する力、挑戦する力です。自分自身の自由が保障されていると、「学ぼう」「学びたい」になって自主的に学んでいく、互いを支え合い、教え合う。善隣幼稚園も目指すものは同じです。自分の足で立って自分で考えて表現をして、そして支え合う。そして一緒だから挑戦もできる。こうした環境を作ることが目標です。（参考文献:『「みんなの学校」が教えてくれたこと 学び合いと育ち合いを見届けた3290日』 木村泰子著）

(2026.9)